

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 伊藤 友一

論 文 題 目

エピソード的未來思考におけるイメージ構築のメカニズム

論文審査担当者

主査	名古屋大学大学院環境学研究科教授	川口 潤
委員	名古屋大学大学院環境学研究科教授	唐沢 穰
委員	名古屋大学大学院環境学研究科准教授	鈴木 敦命

論文審査の結果の要旨

本論文は、人間が未来を心の中でシミュレートすることができる能力の背後にあるメカニズムを明らかにしようとする研究である。このような能力はエピソード的未来思考 (episodic future thinking) と呼ばれ、過去の自己の体験の記憶であるエピソード記憶の想起能力と深い関係があることが近年指摘されているが、そのメカニズムについては研究途上にあり、本論文は認知心理学実験、計算機シミュレーションを用いてその解明を目指すことを目的としている。

本論文は7つの章で構成されている。第1章では、エピソード的未来思考研究の現状について概観し、エピソード記憶や意味記憶研究との関連、および想起イメージの詳細さに影響する要因について議論した。第2章では、エピソード的未来思考におけるイメージ構築過程について、構築的エピソードシミュレーション仮説を述べた。この仮説では、過去の経験の記憶であるエピソード記憶から記憶情報の断片を検索、統合し、将来経験する出来事のイメージが構築されるとするものである。一方、イメージの枠組みを構成するためには意味記憶の役割が重要であることについても議論した。第3章では、未来の出来事の想起時におこなわれる、エピソード記憶情報の統合に中央実行系が重要な役割を果たしているということ、二重課題を用いた心理実験によって明らかにした。第4章では、意味認知症患者が未来のイメージ化に困難を示すという研究を背景に、意味記憶がどのようにしてエピソード的未来思考を支えているのかを、意味認知症患者のシミュレーションモデルを構築することによって検討した。その結果、実際の意味認知症患者のエピソード的未来思考と一致するモデルの振る舞いが確認された。第5章では、未来の出来事想起時に、自発的な情報の活性化が生じている可能性を、展望記憶パラダイムを援用した心理実験によって明らかにした。第6章ではより現実的な場面において、エピソード的未来思考が、人間の認知活動にどのような影響を及ぼしているのかを検討した。第7章では、本論において得られた知見を総括し、総合的な考察を行った。

本研究は以下の点が評価できる。第一に、近年の関心が集まっているエピソード的未来思考に関する背景メカニズムを、これまでの記憶研究の理論を援用しながら精緻な心理実験によって明らかにしたこと、第二に、エピソード的未来思考の背景メカニズム解明に計算機シミュレーションという手法を用いる可能性を開いたことである。審査委員からは、シミュレーションモデルが必ずしも脳の構造を反映していないこと、未来の出来事の想起には「自己」の投影が必要と考えられるがその要因が含まれていないことなどが質問されたが、それらは今後の課題として認識されており、本研究の知見はエピソード的未来思考に関するメカニズム解明に大きく貢献する研究として重要であることが議論された。

以上のように、本研究はエピソード的未来思考に関わる要因を実験的手法および計算機シミュレーションによって明らかにしたという点で心理学の発展に大きく貢献した。よって本論文の提出者伊藤友一君は博士(心理学)の学位を授与される資格があるものと判定した。